

1社になってしまった桶師集団―藤井製桶所

株式会社藤井製桶所

上 芝 雄 史

大阪府堺市で木桶、主に大桶を製作している株式会社藤井製桶所は創業から約 100 年が経ちました。私 ^{うえしばたけ} 上芝雄史は 3 代目で、この業界に入ってから約 50 年になります。

木桶とは複数の材木を寄せてタガで締め、底板をはめこんだ木製容器のことで、その中でも大型のものを大桶と呼びます。大桶は主に日本酒や味噌、醤油、食酢などの発酵食品の製造工程で使用します。大桶は非常に寿命が長い道具です。日本酒蔵で使用した後は味噌・醤油・食酢蔵で使用され、約 150 年活躍します。人の寿命より長いので、蔵元様は永久に使用できると勘違いしているほどです。戦前まではごく当たり前の道具でしたが、今となっては珍しい物になってしまいました。なぜそうなってしまったのか。時代に流されてきた木桶業界を私共の変遷と重ねながら述べていきます。

ちなみに私共の創業年は明確にはわかっていません。ただ、1975 年（昭和 50 年）初代 ^{きよはる} 藤井清春が亡くなった後、彼が日々祈りを捧げていた三宝荒神様の神棚の中から、清春自身が書いた経歴書の複写が見つかりました。その文書は 1922 年（大正 11 年）に木材調達資金を山内銀行（のちの三和銀行、現在の三菱 UFJ 銀行）から借り入れるために作成されたもので、その時点ですでに事業を営んでいたことが明らかになりました。

■「大正～昭和」

初代 藤井清春は 1892 年（明治 25 年）に神戸市の農家の次男として生まれました。当時は「生家を継ぐのは長男のみ」という風潮であり、次男以下は



家を出て分家として独立するか、本家を支えるのが一般的でした。そのため清春も家を出て、当時手間賃が高く人気のあった大桶製作の専門職「桶師」に憧れて、神戸の灘三郷で盛大に業務を行っていた桶師集団「桶卯」の見習いとして入門しました。桶師チームの構成は、5 人一組で親方・職人・ウロウロ（見習い）に分かれていました。親方が手間賃の半分を取り、職人は 2

人ぶち、ウロウロは 1 人ぶちの山分け手間だったと聞いています。収入から考えると、親方とウロウロでは大きな差があり、「技術修得後はなるべく早く退職して、独立するのが賢い。」と考え、同僚の大垣元雄氏とともに堺で独立しました。

当時の堺は「もの作りの町」として栄えていた処です。堺には今も残る旧街道（長尾街道、西高野街道、竹内街道、紀州街道、吉野街道）が、堺市内を起点に放射線状に拡がり、各地の産物が堺に集まる地の利でした。集まった産物は堺で加工され、製品として、住吉大社前を通る「なにわ大道」を経て、大阪市内へ運ばれました。大阪は商人の町であり、利益につながるものは全国津々浦々へと届けられました。

当時の醸造業界には、醸造用品を専門に扱う総合商社が数社存在していました。これらの商社は醸造用品の販売だけでなく、売れ行きの悪い蔵元の酒を仲介する酒問屋の役割も担っていました。また、後継者のいない蔵元には婿養子を紹介するなど、蔵元と密接に連携しながら業界を支えていたのです。堺市内にも、かつては醤油・食酢・日本酒の蔵元が数多く存在し、発酵食品の市場を支えていました。そ